



Subaru

男声合唱団 ニュース№527 15. 10. 19

「昂」「春を待つ」「道」「美しく碧きドナウ」の4曲 をレッスンしました

10月16日

□10月16日(金)の定例レッスンは佃さんの体操・千秋さんのヴォイストレーニングのあと、本並先生の指揮で、「昂」「春を待つ」「道」「美しく碧きドナウ」の4曲を、近藤静さんのピアノ伴奏で練習しました。参加者は全34名でした。



□「昂」の曲は第10回記念コンサートのアンコール曲のひとつとして、「I've got Six Pence」ともに予定しています。「春を待つ」「道」は「うたごえ祭典 in 愛知」での発表曲として、最後の完成段階を持って行くための集中したレッスンとなりました。「美しく碧きドナウ」は暗譜で歌うことに向けて、軽やかで華やかなワインナーワルツとして、その美しく明るい雰囲気を、指揮者の要求どおり声とリズムにどう乗せていくか、各パートごとそして全体でしっかりと合った声にするために苦労しました。

バリトン 「特別団員」とともにパートレッスンをしました。10月13日(火)

第10回記念コンサートに「地底のうた」「人間の歌」「歓びのナーダム」を一緒に歌う特団員のメンバーのうち、9名の方がバリトンです。10月のバリトンパートレッスンは、特団員の方々からの要望もあり、また正団員にとっても必要であるということで、「人間の歌」と「歓びのナーダム」



の2曲を中心に、2時間の練習時間をいっぱい使って練習しました。特団員7名、正団員6名の13名の出席でした。前もって「人間の歌」はパートリーダーの努力で、中音部の楽譜を作成し、郵送してレッスンに備えていただきました。小節ごとに何度も繰り返し音合わせをしました。

練習終了後、懇親会を「月み庵」で行い、森二三さんもご出席いただいて、乾杯し、和やかなひとときを過ごしました。

(11月も合同のレッスンを予定しています。) (報告:吉川)

No.527(1/3)

(参考資料)

2015年9月22日に行われた「2015大阪のうたごえ合唱発表会」の「総評」が講評者の藤井幸枝さんから出演団体へ送られてきました。「昴」のメンバーにとっても大切な問題提起ではないかと思い参考として「昴ニュース」に掲載させていただきました。(編集子)

2015 大阪のうたごえ合唱発表会 総評

コンクール部門 合唱の部(一般A・B、女性の部、職場の部) 9/22

「誰のために 何を どのように歌うのか」うたごえの創造の源泉が豊かに流れ、うたう意欲を音楽表現へつなげた演奏は、聴く人の心をとらえます。今回もそのような充実した演奏に出会えたことはとても嬉しく、励みにもなりました。一方でやや小さくまとまり、舞台から客席に届いて来ないもどかしさを感じた場面も多くありました。

ピッチを気にしているからでしょうか。女性の薄く浅い声質が多くなりました。男性も年齢の上昇で筋力は衰えます。私たちは体が楽器です。体の支えからの息と豊かな響きを獲得するために手立てをとりましょう。「今が一番若いんだから～！」鈴木捺香子先生がおっしゃった言葉ですが、それぞれの条件に合ったスタイルでぜひ具体してみてください。又声の表情や息づかいは一色ではありません。曲の描く世界から求められる声は曲毎に、或いは一曲の展開の中で刻々と変化するはずです。新しい声の表情・表現を歌の中で見つけあいましょう。

指揮者は音楽づくりの責任者です。日々の練習でのポイントの設定は確かに、歌い手やピアニストとの音楽的コミュニケーションは出来ているか、手は良い声を引き出しているか…。自己解釈に陥らず、学びの裾野を広げ豊かな音楽づくりを目指しましょう。今回もピアノの音量が大きすぎる、ペダルを使い過ぎる演奏が数多くありました。よりよいバランスでの演奏の為に、ピアニストと一緒に本番前のリサーチもしっかりしましょう。

なぜこの曲なのか、選曲の動機は明確でしょうか。テーマへの共感だけでなく曲への深いアプローチの上で、合唱団の栄養になり魅力を更に輝かせるものかどうかの検討を丁寧にしましょう。(1曲だけでの発表の場合、特に難しさがあります。)歌い手の自発性が發揮され、要求と課題に見合った選曲が大切です。

創作の部・小編成の部(コンクール部門)・交流の部 9/23

《創作の部》

昨年は添削が必要な作品が多く見られましたが、今年はその必要が無いほどにレベルが上がりました。昨年発表会後に専門家(林保雄先生)との添削による循環が生まれたことは大きな力になっています。音符を音楽していく作業ではやるべきことがたくさんあります。その意味で3びきのくまの「へいわってすてきだね」は演奏としてとても素晴らしい、作品

の世界を見事に伝えました。歌い込みをし、色々試しながら自分達の歌をつくり上げて行きましょう。

《小編成》

それぞれの団体に個性があり楽しいステージとなりました。演奏をまとめ上げる力の付いたグループも増えました。しかし個々の声がもっと前に届きたい。横で合わせるのでなく、客席まで届くストロークの長い息と声が欲しいと感じます。その上でグループに応じた表現スタイルの研究を。一人ひとりが表現者として自立することで、その協演となる舞台はより立体的で豊かになります。推薦された団体は正にそれを実現しています。

《交流の部》

今回交流の部として独立した発表の枠が設定されました。16団体のうち5団体が子ども・親子の合唱団で、子ども達のしっかりした歌いっぷりが清々しく、親子の合唱はどれも水準が高く、子ども大人がそれぞれに生き生きと演奏する姿が印象的でした。若々しいシルバー合唱団、命の輝きを伝える障害のある仲間達、それぞれの生い立ちや地域への想いを育む合唱団など、それぞれの存在が際立った発表会となりました。中でも益ヶ崎合唱団の演奏は、人が歌い始める瞬間に立ち会ったような新鮮な感動を与えました。

3部門ともに楽しい舞台が繰り広げられましたが、客席に空席が目立ち残念でした。互いに聴き合い学び合う年に一度の機会を大切に出来たらと思います。又ピアノの音量とペダルの多様の問題はこの日も同様の課題として残されました。

2日間を通して

1日目のコンクールの部で一昨年に比べややスケール感とアピール度が減退した印象を受けたのは、2日目に交流の部が移動したことによる原因の一端があるのかもしれません。しかし願わくばコンクールの部でも守りに入らず、自発的な歌い手による漫刺とした演奏をもっと聴かせていただきたいと思いました。

今回初めて2日間を通して全ての部門の発表を聴かせていただきました。合唱の部だけでは見えなかった働き手、リーダー、想定外(失礼)の力を發揮している方々に接して、大阪のうたごえの全体像に触れることができました。うたごえが音楽運動として成熟し発展していくことが、多くの人の力と協力の上に成り立っていることを改めて実感しました。この様な機会を与えていただいて感謝しています。有難うございました。

日本のうたごえ全国協議会常任委員

合唱団おとくに指揮者

藤井 幸枝

No.527(3/3)